流通科学大学論集―人間・社会・自然編―第 30 巻第 2 号，75-86（2018）

高等学校における職業指導の実践的課題
― 社会経験の少ない生徒に「将来の職業」を考えさせる難しさ ―

Problems in Practicing Vocational Guidance in Senior High School
― Difficulty of Having High School Students with Poor Social Experience Think about Their Future Occupation ―

森脇　一郎*
Ichiro Moriwaki

新しいタイプの高校では、入学直後から「将来の職業」や「将来の夢」を見つけることを生徒に求める。しかし、社会経験も少なく親の仕事内容も知らない高校生に、急いで「将来の職業」や「将来の夢」を決めさせると、高校生にわかりやすい「士」「師」「員」「官」のつく専門職や人気・稀少・学歴不問の ASUC 職業しか思い描けないのではないかということを、A 高等学校 2 年生の「将来の職業」希望調査のデータで検証した。
キーワード：高等学校、キャリア教育、将来の職業、「士・師・員・官」職業、ASUC 職業

Ⅰ．はじめに

社会経験の少ない高校生に、将来の職業を早くから決めさせることに無理はないのだろうか。高校で学級担任をしていた時、そのような思いを常に持ち続けていた。筆者がかつて勤務していた高校では、入学直後から将来の職業について考えさせ、1 年次の夏休みに「職業インタビュー」の課題を課すなど、早い時期から将来の職業について考えさせることを行っていた。その背景には、この高校は普通科総合選択制と呼ばれる新しいタイプの学校で、生徒は 2 年次から 7 つの系列「社会科学・国際人文・総合科学・人間科学（スポーツ、福祉）・ビジネス・情報科学・芸術（音楽、美術）」に分かれて学習に取り組む選択システムがあり、入学から半年後の 10 月末にはどの系列に所属するか決定しなければならないという、この学校独自の事情があった。すなわち、将来どのような分野に進むのか、さらには、将来どのような職業に就きたいのか考えさせることによって、所属する系列での学習とその後の進路の整合性を担保したうえで、いずれかの系列を選択させる必要があるということであった。また、1 年次の前半に将来の職業をある程度決めさせることによって、それを実現できる進学先の学部・学科に目途をつけさせ、2・3 年次以降の科目

*流通科学大学人間社会学部非常勤講師、〒651-2188　神戸市西区学園西町 3-1
常葉大学経営学部、〒431-2102　静岡県浜松市北区都田町 1230

（2017 年 8 月 29 日受理）
©2018 UMDS Research Association

選択で入試に必要な科目の履修漏れを防ぐという意味もあった。

このことを踏まえても、担任として学校全体で統一的に進められる職業指導（以下、「キャリア教育」という[1)]）を行っている時、「こんなに早く将来の職業を決めることができるのだろうか」「決めさせて良いのだろうか」という思いを常に抱いていた。それは、社会経験が少ない高校生に急いで将来の職業を考えさせると、生徒にとって比較的簡単にイメージしやすい「士」「師」「員」「官」のつく専門職[2)]や、荒川葉が定義した人気・稀少・学歴不問の ASUC[3)] のような職業（これについては後で詳しく述べる）を選ぶ傾向があることを経験的に感じていたからである。

本稿においては、筆者がかつて勤務した新しいタイプの高校とほぼ同じ教育システムを持ち、高校入学直後の早い時期から「将来の職業」や「将来の夢」を考えさせることを行っている A 高等学校 2 年生の 2017 年 4 月時点の「将来の職業」希望調査のテータを基に、「士」「師」「員」「官」のつく専門職や ASUC 職業を希望する生徒がどの程度いるのか集計し、そこから読み取ることができる特徴について分析を試みる。さらに、高校生の早い時期から「将来の職業」を考えさせることの難しさについて、教育学研究の知見を踏まえながらその問題性について検討を加えていくことにする。

Ⅱ．教育学研究の分野における先行研究

高校生の早い時期に「将来の職業」を決めさせ、「その実現に向けて努力する」という現状のキャリア教育の在り方には次の 2 つの問題があると思う。まず第 1 に、アルバイトの経験もなく、親の仕事内容も詳しく知らない高校生に将来の夢や職業を考えさせた時、これまでの経験のなかで接したことのある「わかりやすい職業」しか思い描けないのではないかということ。第 2 に、このキャリア教育のモデルは、医師や薬剤師、建築士のような専門職を目指す場合には適しているけれども、普通の会社員のような非専門職に就くであろう高校生や高校卒業と同時に就職を希望している生徒には適さないのではないか、ということである。

この 2 点を確認したうえで、ここでは、教育学研究の分野で、この問題がどのように議論されているか 3 つの先行研究をみておくことにする。

１．夢追求型キャリア教育に関する研究

現在の高校において主流にある、「自分探し」に始まり「なりたい自分」「将来の夢」を見つけるキャリア教育の教育実践上の問題点を社会構成主義の立場から明らかにしたのが、荒川葉『「夢追い」型進路形成の功罪－高校改革の社会学－』である。

1990 年前後に始まる「第 3 の教育改革」によって「在り方生き方指導」が強調されるようになったが、その背景には、旧来の進路指導がテストで測られる一元的な能力に基づいて進路が割り振られていた[4)]ことを是正するという目的もあった。そのため、この時期につくられた普通科総合

選択制や総合学科などの新しいタイプの高校では、生徒の「興味・関心」「将来の夢」に沿った進路形成を推奨するとともに、生徒の多様な「将来の夢」を重視した多限的・選択的キャリア教育が積極的に導入されているといえる。しかしそれは、生徒がもともと持っていた「憧れ」や「あわい夢」を、現実の「将来の夢」として大きく立ち上がらせる役割を果たす結果となり、依然として大学入試本位に特化したままの上位高校と、生徒の「夢追い」に任せるがために「興味・関心」「将来の夢」に邁進し、結果的に高校の時点から学ぶことをやめる生徒を多く生み出す中・下位校の間に、学習と進路形成に分断が生じている[5]ことを明らかにしている。

荒川は、その結論を導く研究手法として、新しいタイプの高校における「夢追い型キャリア教育」において、「人気があり稀少で、学歴不問の職業」を生徒が選好する傾向があることに着目し、人気（Attractive）・稀少（Scare）・学歴不問（UnCredentialized）の頭文字を取った荒川自身の造語による「ASUC 職業」という考え方を用いる。それは、①その職業を希望している生徒の割合と国勢調査によるその職業に就いている人の割合を比較して、この数値が 5 倍以上の職業を「人気稀少職」とし、②国勢調査による各職業の学歴構成において、大学・大学院卒業者の割合が 70%以下の職業を「高学歴の要件なし」とみなして、この 2 項目に当てはまる 27 の職業《表 1》を「ASUC 職業」として抽出している。[6]

表 1. 荒川葉による「ASUC 職業」一覧

グラフィックデザイナー	シンガーソングライター	作家
ゲームデザイナー	バンドマン	脚本家
ジュエリーデザイナー	ギタリスト	イラストレーター
ファッションデザイナー	プロ野球選手	漫画家
デザイナー	プロサッカー選手	メークアップアーティスト（ヘアメイク）
フラワーデザイナー	プロバスケ選手	ゲームプログラマー
インテリアデザイナー	プロゴルファー	トリマー
ファッションコーディネーター	Ｆ１レーサー	カメラマン・写真家・フォトグラファー
ミュージシャン	小説家	動物園の飼育係

本稿の出発点となった「高校入学後の早い時期から将来の職業を決めることができるのだろうか」「決めさせて良いのだろうか」という筆者の素朴な疑問を考えていく際に、荒川の解明した「夢追求型キャリア教育」の問題点[7]は、多くの示唆を与えるものである。また、「ASUC 職業」は、高校生の進路や高校生そのものを理解するうえで極めて有効であることから、本稿のデータ分析においてもその考えを活用することにした。

２.「メンバーシップ型」雇用慣行と「将来の職業」の不一致に関する研究

そもそも、わが国の採用や雇用の仕組みは、厳密にいえば「就職（職に就く）」ではなく「就社（会社に入る）」という仕組みになっている。例えば、わが国で会社員や公務員になる場合、入社

した後に自分がどのような仕事をすることになるのかは、基本的に採用する組織が決めることであって、自分自身では選ぶことができない。したがって、現実的に多数を占める一般企業の非専門職（普通の会社員）として就職するであろう高校生や大学生に、「将来の職業」や「将来の夢」を見つけさせることは非常に難しいといえる。その証左として、「なりたい職業ランキング」において小学生から高校生まで上位に登場するのは専門職ばかりである[8]ことを指摘し、現状のキャリア教育の在り方に疑問を呈しているのが、児美川孝一郎『夢があふれる社会に希望はあるか』である。

さらに児美川は、高校生にもなれば半数は将来の夢など持っていないことを次の 3 つの理由から述べ、そのような高校生に早い時期から「将来の職業」や「将来の夢」を描かすことは、早期に人生の選択肢を狭めることにつながる危険性があることを問題視している。それはまず第 1 に、夢というものはそもそも年齢が上がるにつれて、しだいに「萎んでいく」ものであると同時に実現可能性という現実が重くのしかかってきて、「現実」と「夢」のあいだに葛藤が生じてくること。第 2 に、高校生になっても職業や仕事の世界をまったく知らない現実があること。つまり、実際に働いたことがないという意味で「知らない」のは仕方ないけれども、知識としても足りないし、イメージも持てていない。したがって彼等は、消費者として自分が接することのある仕事しか知らない。第 3 に、大学進学率が 5 割を超えた状況にあっては大学受験の比重が大きくなり、「職業や仕事のことを考えるのは進学した後でよい」とする高校生・保護者を含む風潮が世の中にあることである。[9]

わが国における採用や雇用のシステムの多くは「就社」であり、採用されることはその会社のメンバーシップ（membership）を手に入れることであって、その会社でどのような仕事（job）をすることになるのかはわからない。したがって、高校生の時点で具体的に「将来の職業」を考えさせるのは無理であるとする児美川の主張は、まさに筆者の問題意識に合致するものである。

３．心理主義的傾向と職業教育を伴わないキャリア教育の危険性を指摘する研究

佐々木英一は、「現代における職業指導の役割と課題－ノン・キャリア教育の構築」『ノンキャリア教育としての職業指導』のなかで、現状のキャリア教育には 2 つの教育実践上の課題があることを指摘している。第 1 に、「主体性」「自己決定」「自己責任」をキーワードとする心理主義的傾向が強すぎること。つまり、新自由主義的思想による現状のキャリア教育の下では、選択を自己決定するために、さまざまな手法を用いた「自己分析」を通じた「自己理解」を行い、さらに「エンプロイアビリティ」を高めるために「人間関係形成能力」「情報活用能力」「意思決定能力」（「キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議」）を高めることを強調する。しかし、就職の実際の場面においては、個人の能力や資質とは無関係に、圧倒的に時々の雇用情勢に規定される。すなわち、いくら上記の努力を積み重ねてみたところで、求人がない、仕事がない状況に

あってはその結果は報われないとしている[10)]。第2は、旧来の「職業指導」や「職業教育」という言葉に代えて「キャリア教育」という言葉を使うことによって、教育指導の範囲と対象が無限に拡散してしまう危険性についての指摘である。「生き方」「在り方」指導の名の下で、学校現場では「人生観」「勤労観」「人生設計」「キャリア開発」などの漠とした言葉が氾濫するが、そもそもそうした課題を学校教育が担えるのかという問いである。さらに、学校教育が果たすべき役割は「望ましい職業観・勤労観」なるものを押し付けるのではなく、個々人が自らの人生を通して各自の「職業観・勤労観」をつくり上げていくために必要な知識や技術、そして、学校での豊かな人との交わりの経験を保証するというごく基本的な営みであり、高校段階にあっては、特に具体的な職業教育（農業・工業・商業教育など）との結びつきがあってこそ、その具体性が保証される[11)]ことを強調している。さらに佐々木は、特に高校卒業後すぐに就職する高校生が職業教育を受けることは、厳しい大海に泳ぎ出すうえで不可欠の「プールでの水泳練習」といえるが、職業教育を伴わないキャリア教育は「畳の上での水泳練習」のようなもの[12)]と断じている。すなわち、佐々木が問題視する職業教育を伴わないキャリア教育の結果、地に足がつかないASUC職業を希望するような生徒を大量に生み出しているとみることもできる。高校で商業科教員として職業教育に携わってきた筆者の立場からすると極めて重要な視点であるといえる。

Ⅲ．A高等学校2年次4月の「将来の職業」希望調査より

それでは、教育学研究の分野における3つの先行研究を確認したうえで、A高等学校2年生の2017年4月時点の「将来の職業」調査データを分析することにする。

１．A高等学校の概要

ａ．学校タイプ・生徒数・入学難易度

1998年、普通科総合選択制の新しいタイプの高校として、語学、人文、理数、美術、音楽、商業、情報、福祉、体育の9系列でスタートした学校である。1学年10クラス（400人）。地域の塾で用いられている入試偏差値は52前後。総じて中位校といえる。

ｂ．進路状況

2014年度から2016年度卒業生の進路状況を示したものが《表2》である。一見すれば進学校に見えるが、国公立大学への進学（毎年10～15名程度）の多くはAO入試や推薦入試によるものである。それは、A高等学校は新しいタイプの高校であるため、学校設定の特色科目を系列の必修科目とする必要があることから、国公立大学の入試に必要な5教科7科目を漏らさず

表2．最近３年間の進路状況

大学	65.4%
短大	7.7
専門学校	12.2
就職	3.1
浪人・他	11.6

履修することができないことも関係している。なお、就職者は例年 10 名前後である。

２．データの整理と集計方法

まずは、調査データとその集計方法から説明することにする。「将来の職業」希望調査は、各学年の毎学期初め（この学校は 2 学期制のため 4 月と 10 月）の年 2 回実施している。今回の調査データは 2017 年 4 月に 2 年生《表 3》を対象に行ったものである。調査用紙は「希望する将来の職業」という四角の空欄が設けられているだけの自由記述であり、今回は、生徒が記述した通りに担当者が入力したデータを Excel ファイルでご提供いただいた。そのため、「希望する将来の職業」の欄に記載されている職業名の書き方は生徒によって様々である。一例を挙げると、「教師」「先生」「教師（社会）」「体育の教諭」「中学校教師」というように校種や教科を特定できないものや、「営業職」「会社員」「事務職」「OL」「商社やメーカー希望」「旅行会社」のように、一般企業の職種と業種が混在するかたちで記されていたりする。そこで、前者の場合は「教員（社会）」とか「教員（中学校）」、後者の場合は「会社員（一般企業）」とか「会社員（OL）」というように可能な限り職業名を統一し、393 名の「将来の職業」を 93 の職業に分類し、「専門職」「ASUC 職業」「それ以外の職業」として集計した。

表 3. 調査対象者

系列	人数
語学	53
人文	87
理数	44
美術	27
音楽	21
商業	37
情報	39
福祉	60
体育	25
合計	393

ａ．専門職

「士」「師」「員」「官」などの文字がつく 33 の職業に加え、カタカナの職業名ではあるが日本語に置き換えた時、「士」「師」「員」「官」に該当するパイロット、スポーツトレーナー、ウェディングプランナーの 3 つを加えた 36 の職業を「専門職」とした。

具体的には、保育士、教員（幼稚園）、教員（小・中・高）、研究者、保健師、看護師、助産師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、音楽療法士、柔道整復師、歯科衛生士、薬剤師、栄養士、管理栄養士（スポーツ）、調理師、社会福祉士、心理士、救急救命士、税理士、公認会計士、通訳士・通訳案内士、入国審査官、警察官、科学捜査研究員、消防士、自衛官、建築士、庭師、図書館司書、博物館学芸員、美容師、スポーツトレーナー、ウェディングプランナー、パイロットである。なお、公務員は「員」という文字がつくが、行政職の場合は入職時に仕事の内容が決まっていないメンバーシップ型であることから専門職から除外した。一方、ASUC 職業に分類したデザイナーやイラストレーターも専門職といえるが、1 人につき 1 分類で集計していることから ASUC 職業で集計し専門職からは除外した。

ｂ．ASUC 職業

荒川の分類《表 1》を参考に、次に示す 14 の職業を「ASUC 職業」とした。デザイナー、演奏家、アニメ、イラストレーター、声優、動物に関する仕事、イルカのトレーナー、インストラクター、俳優、野球の選手、作家、女優、スタイリスト、メークアップアーティスト。

ｃ．それ以外の職業

上記、「専門職」にも「ASUC 職業」にも属さない職業を「それ以外の職業」としてまとめた。例えば、会社員、公務員、IT 関係の仕事、空港での仕事などの他、明確な分類が困難なものも一括して「それ以外の職業」とした。

ｄ．集計不能

「集計不能」に分類した 3 名は、「殺処分防止活動」「大学生」「ボランティア」である。

３．結果の分析

在籍数 393 名の「将来の職業」希望を集計したものが《表 4》である。予想通り、生徒にとってわかりやすい「士」「師」「員」「官」のつく専門職が 166 名で全体の 42.3％を占めた。一方、人気があり稀少で、学歴不問の職業である ASUC 職業を希望する生徒は 44 名で、全体の 11.2％、両者の合計は 53.5％であった。さらに注目すべきは、「未定」ないしは空白が 87 名で全体の 22.1％を占めていることである。つまり、高校入学後の早い時期から「将来の職業」や「将来の夢」を考えさせても、「なりたい自分がわからない」生徒が 5 人に 1 人か 4 人に 1 人は存在することを意味しているといえる。

表 4.「将来の職業」希望

分　類	男女計		男子		女子	
	人数	割合%	人数	割合%	人数	割合%
専門職	166	42.3	58	38.7	108	44.4
ASUC 職業	44	11.2	9	6.0	35	14.4
それ以外の職業	93	23.7	46	30.7	47	19.3
「未定」・空白	87	22.1	35	23.3	52	21.4
集計不能	3	0.8	2	1.3	1	0.4
合計	393	100.0	150	100.0	243	100.0

さらに、この「未定」および空白とした生徒を所属する系列ごとに集計してみると、一つの傾向を読み取ることができた（《図 1》《表 4》）。つまり、文系に近い「人文」「情報」「語学」「商業」系列は「未定」ないしは空白の割合が高く、理系の「理数」とその系列の性格が比較的明確な「福祉」「音楽」「美術」「体育」系列はこの割合が低くなっていることである。これは、多くが大学の

文系学部に進学し、一般企業の普通の会社員として就職すると考えられる前者の高校生にとって、現時点で具体的な職業（job）をイメージすることが難しいと読み取ることができるのではないだろうか。まさに、先にみた児美川の指摘と符合するといえよう。なお、社会全体で最も多数を占める会社員を記した生徒は 19 名（4.8%）、公務員は 10 名（2.5%）であった。

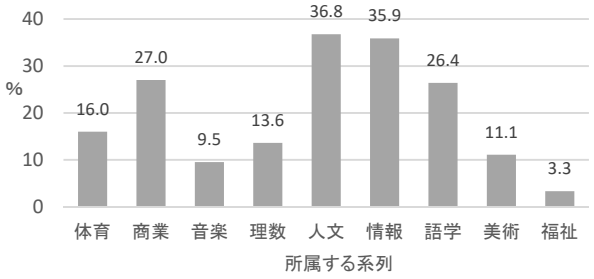


図 1.「未定または空白」の生徒割合

表 4. 未定および空白数

系列	在籍数	「未定」空白
語学	53	14
人文	87	32
理数	44	6
美術	27	3
音楽	21	2
商業	37	10
情報	39	14
福祉	60	2
体育	25	4
合計	393	87

以上、非常に簡素な分析ではあるが、高校入学直後の早い時期から「将来の職業」や「将来の夢」を考えさせている A 高等学校において、「士」「師」「員」「官」のつく専門職や ASUC 職業を希望する生徒の割合は決して低くない [13] ことがわかる。このことから、社会経験が少ない高校生に急いで将来の職業を考えさせると、生徒にとって比較的簡単にイメージしやすいこれらの職業を希望する傾向があるのではないかという筆者の仮説は、問題の本質から大きく外れていないといえるのではないだろうか。

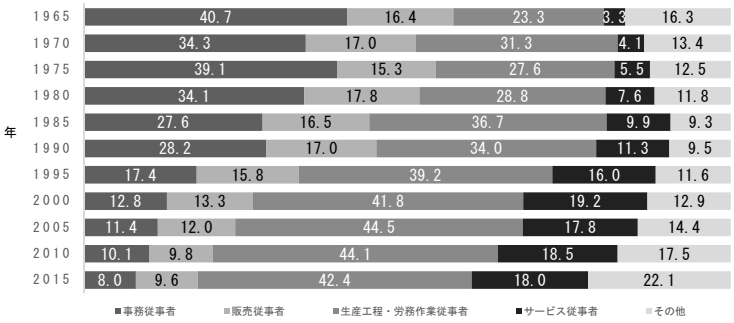
Ⅳ. 高校生に「将来の職業」を考えさせることの難しさ

ところで、高校生に「将来の職業」を考えさせるといっても、高校卒業後すぐに就職するのか、大学進学の後に普通の会社員として就職するのか、専門職として就職するのかの違いによっても「将来の職業」を考えさせることの必要性と意味は大きく異なるであろう。そこで本稿の最後に、高校卒業後すぐに就職する場合と大学進学の後に普通の会社員として就職する場合を取り上げ、この問題を考えてみることにする。さらに、ワークシートを用いて高校生に「将来の職業」を考えさせるキャリアプランニング型授業（心理主義的授業）で、本当に人生を考えることができるのかということについて、筆者の高校での教育実践を踏まえて私見を述べたいと思う。

１. 高校卒業後すぐに就職する場合

1990 年代初頭のバブル経済崩壊以降、高卒就職が大変厳しい状況にあることは周知の事実である。平成 28 年度学校基本調査（文部科学省）から高等学校卒業者の就職状況を抜き出してみると、

高卒で就職した者は男子 115,484 人、女子 74,827 人の合計 190,311 人（全高校生の 17.8%）である。その業種をみると、男女とも最も多いのが製造業で、男子 45.5%、女子 28.1%であり高卒就職者全体の 38.7%を占めている。次に、男女別に職業内訳をみると、男子の第 1 位は生産工程従事者 47.8%、第 2 位建設・採掘従事者 9.2%、第 3 位サービス職業従事者 8.1%で、上位 3 つの職業で全体の 65.1%を占めている。女子は、第 1 位サービス職業従事者 27.4%、第 2 位生産工程従事者 22.9%、第 3 位事務従事者 21.9%で、グレーカラーとブルーカラーの上位 2 つの職業で全体の 50.3%を占めている。



資料出所：『学校基本調査』（各年度）より作成

図 2. 新規高卒の職業別就職状況の推移（男女）

一方、新規高卒就職者の職業別就職状況（男女合計）の推移を示したものが《図 2》であるが、高度経済成長期の 1965（昭和 40）年には高卒就職者の 4 割がホワイトカラーの事務職に就いていたが、現在は 8%程度に落ち込み、代わって工場労働を中心とする生産工程・労務作業者とサービス従事者の伸びが著しいことが確認できる。

このような状況のなかで、高校卒業と同時に職業の世界に入っていく生徒達に、目指すべき「将来の職業」を描かせることに意味があるといえるであろうか。それは、いくら「将来の仕事」や「将来の夢」を描かせてみても、結局は工場や飲食店で働くことになるのであり、まさに、現実から乖離した「夢」をみさせてしまうことになるという理由からである。

２．大学進学の後に普通の会社員として就職する場合

リクルート社の『就活白書 2016』[14] によると、大学生が就職活動で行うエントリー数について、プレエントリー[15] の平均社数が 2015 年卒 56.30 社、2016 年卒 42.89 社。本式のエントリーシートの平均提出数が 2015 年卒 19.43 社、2016 年卒 17.63 社となっている。これは、一人の学生が就職活動で応募した企業の数とみることができるが、このような就職活動の過程で学部不問の非専門職（普通の会社員）に応募する大学生に対して、高校生の時から「将来の職業」を描かせ

ることにどのような意味があるというのだろうか。児美川はエントリーシートにまつわる話として次のような事例を挙げている。少し長くなるが引用したい。「今日の午前中にA社に向けて『自分の希望や実現したいと考えていることに照らして、御社こそが第一志望です』と書いたかと思えば、午後にはB社に向けて、同じ趣旨のPRを、B社に合わせてカスタマイズして書くわけです。もちろん、こういうことが、苦もなくできてしまう『器用』な学生もいます。しかし、まじめで誠実な学生ほど、ある種の『後ろめたさ』を感じながら、なかなか筆が進まなかったりするのです」。[16)]

このような大学生の就職活動の一端をみても、非専門職の普通の会社員になる人間にとって、高校で「将来の職業」を明確にすることは難しいといえるのではないだろうか。だから「将来の職業」を「未定」や空白で提出する生徒が22.1％もいるのではないか。また、もしかするとその煩わしさから逃れるために、少なくない高校生が「士」「師」「員」「官」のわかりやすい職業を「とりあえず」希望する職業として学校に提出しているのではないかというのは言い過ぎであろうか。

３．ワークシートで人生を考えさせることについて

ところで、筆者が高校の学級担任としてキャリア教育を行うなかで違和感を覚えたものの一つに、「将来の職業」や「将来の夢」を考えさせる際に用いるワークシートがあった。高校で用いていた当時のワークシートを提示することができないため、ここでは、厚生労働省委託事業「平成22年度キャリア教育専門人材養成事業」のテキストである『高校におけるキャリア教育実践講習』をもとに話を進めたい。同テキストの巻末資料には、「自己理解」「社会理解・職業理解」「啓発的経験」「キャリアプランニング」の順番で各2～3種類のワークシートと2つの高校の3年間の指導計画例が示されている[17)]。指導の大筋は、①これまでの自分を振り返る（自己理解）、②職業インタビューや仕事研究を行う（社会理解・職業理解）、③職場体験や進学希望校調べを行う（啓発的経験）、④自分の一生についてライフプランを立ててみる（キャリアプランニング）という流れである。紙幅の都合でワークシートの実物を示すことができないため一例を挙げると、「ライフプランシート」と題されたワークシートの記入例[18)]には、「仕事」「家庭」「趣味」「社会活動」「身につけたいこと」の5項目について、現在から80歳半ばまで、就職や結婚、車やマイホームの購入、子供の誕生から60歳の定年退職後に始める介護サポートボランティア参加のことまで、その時の予想年齢とともに示されている。さらに、「将来デザインシート」では、「来年の今頃」「20歳の頃」「30歳」「50歳」「70歳の頃」何をしているか記入する欄があり、「将来を想像してみた感想」と「想像した未来を実現するためにどんな努力が必要？」という欄が設けられている。

筆者なりの言い方をすれば、このワークシートは「真面目に考えれば考えるほど書けなくなるワークシート」であると思う。人生は迷ったり行き詰まったり上ったり下ったり変化の連続である。筆者自身の半生を振り返ってみても、決して紙の上で考えることなどできるはずもなかった

と強く思う。また、高校教員として授業の一場面を思い返してみても、このようなワークシートに積極的姿勢で取り組んだ高校生の姿を思い出すことができない。心理主義的キャリア教育の再考が求められるゆえんである。

Ⅴ．おわりに

誤解のないように述べておきたい。筆者は、高校生が「将来の職業」を考えたり「将来の夢」を持ったりする必要はないといっているわけではない。むしろ専門職を目指す場合は、できるだけ早く志を立て、それに向かって早くから努力した方が良いとさえ考えている。ただし、それが学校という第三者から急いで決めるよう求められた時、高校生は、わかりやすい「士」「師」「員」「官」のつく職業や ASUC 職業しか思い描けないのではないかということをいいたいのである。

最後に、今回の調査データは A 高等学校の 2 年次 4 月の単発的なものであったことから、他との比較・分析を行うことができなかった。今後は、複数の学校で 3 年間継続してデータを収集し、各生徒の希望の変化にも注目しながら、この問題の研究をさらに深めていきたい。

引用文献、注

1） 高校教育現場においては、「職業指導」「進路指導」「キャリア教育」という言葉の明確な違いはほとんど意識されることはない。2000 年代初頭に「キャリア教育」の考え方が学校現場に入って以降も、最もよく用いられるのは「進路指導」という言葉である。本稿においては、生徒に「将来の職業」や「将来の夢」を描かせることに関する教育実践上の課題をテーマにすることから、本来は「職業指導」というべきところを「キャリア教育」という表現を用いることにする。

2） これまで「士師業」という言い方がされていたものに加え、学芸員や科学捜査研究員などの「員」と警察官や自衛官などの「官」を加えて、高校生がイメージしやすい専門職として「士・師・員・官」職業という造語を筆者がつくった。

3） 荒川によると、ASUC 職業は高校生のなかで人気が高く、多くの高校生が ASUC 職業に就くことを夢に描いている。

4） 旧来の進路指導は、テストで測られるような能力（一元的な能力）に基づいて進路が割り振られることにより、普通科底辺校では学習の無目的化が、職業科では不本意入学が蔓延したと荒川は述べている。

5） 荒川葉：『「夢追い」型進路形成の功罪－高校改革の社会学』（東信堂，2009）pp.180-185

6） 荒川：同上書，pp.80-81

7） 実現可能性の低い夢に向かって長く引きずられてしまうならば、夢が実現できないと気付いたとしても、すでにその時点から正規のルートに戻ることができない。さらに、高校の時点から夢を求めて学ぶことを止めてしまった生徒は、最底辺の周辺職業かフリーターやニートになる可能性が高いことなどである。

8） 児美川孝一郎：『夢があふれる社会に希望はあるか』（ベスト新書，2016）p.44

9） 児美川：同上書，pp.41-43

10）佐々木英一：「現代における職業指導の役割と課題－ノン・キャリア教育の構築」『ノンキャリア教育としての職業指導』（学文社，2009）pp.4-5

11）佐々木：同上書，pp.5-6

12）佐々木：同上書，p.11

13）「士」「師」「員」「官」の専門職希望者が 42.3%、ASUC 職業希望者が 11.2%、全体で 53.5%の割合としては「多い」と思うが、比較の対象がないために「少なくない」という表現を用いた。

14）リクルートキャリア就職未来研究所『就職白書 2016 －採用活動・就職活動編－』
https://www.recruitcareer.co.jp/news/2016/02/16/20160216_01.pdf，2017 年 8 月 20 日取得

15）プレエントリーとは、会社に「氏名」「住所」「電話番号」「メールアドレス」「年齢」「大学名」などを登録し、会社説明会やエントリーの案内を送ってもらう申し込みのこと。これに対し、本式のエントリーシート（履歴書）を提出することは、面接や筆記試験を受ける申し込みをすることである。

16）児美川孝一郎：『「親活」の非ススメ“親というキャリア”の危うさ』（徳間書店，2013 年）p.131

17）厚生労働省委託事業（平成 22 年度キャリア教育専門人材養成事業）『高校におけるキャリア教育実践講習－キャリア・コンサルティングの理念・手法を活用し、学校現場におけるキャリア形成支援を担う人材を養成－』pp.36-45

18）http://www.mhlw.go.jp/bunya/nouryoku/kyarikon/dl/tekisuto.pdf，2017 年 8 月 20 日取得

19）厚生労働省委託事業：同上書，pp.42-43

参考文献

荒川葉：『「夢追い」型進路形成の功罪－高校改革の社会学』（東信堂，2009）

児美川孝一郎：『キャリア教育のウソ』（ちくまプリマー新書，2013）

児美川孝一郎：『権利としてのキャリア教育』（明石書店，2007）

児美川孝一郎編：『これが論点！就職問題』（日本図書センター，2012）

児美川孝一郎：『「親活」の非ススメ－“親というキャリア”の危うさ』（徳間書店，2013）

児美川孝一郎：『夢があふれる社会に希望はあるか』（ベスト新書，2016）

児美川孝一郎：『若者はなぜ「就職」できなくなったのか？－生き抜くために知っておくべきこと－』（日本図書センター，2011）

斉藤武雄・佐々木英一・田中喜美・依田有弘編著『ノンキャリア教育としての職業指導』（学文社，2009）

筒井美紀：『高卒就職を切り拓く』（東洋館出版社，2006）

堀夕喜衣：『高校就職指導の社会学「日本型」移行を再考する』（勁草書房，2016）

本田由紀：『軋む社会－教育・仕事・若者の現在』（河出文庫，2011）

本田由紀：『教育の職業的意義－若者、学校、社会をつなぐ』（ちくま新書，2009）